白山ふるさと文学賞

第十五回　白山市ジュニア文芸賞　受賞作品

【島清部門】

小学生5・6年　作文の部　優秀賞

「私の将来の夢」

松任小学校六年

川端（かわばた）　千波（ちなみ）

私は将来、介護の仕事につきたいです。

私のおばあちゃんは認知症です。昔はできたことも、どんどんできなくなってしまいました。おばあちゃんは、さっき話していたことをもう一回言います。何回も言います。しつこいからイライラするときもあるけど、それはわざとじゃなくて認知症だから。昔、おばあちゃんは料理もぬいものも、なんでもできました。お父さんは「お母さんの料理も好きだけど、おばあちゃんの料理も大好き」と言っていました。私の音楽バックも体そう服ぶくろも、おばあちゃんの手作りです。保育園のときに作ってもらって、今もとても大事にしています。なぜなら、今のおばあちゃんは料理もぬいものもできないからです。

私の家と、おじいちゃんとおばあちゃんの家はおとなりです。今、おばあちゃんはおじいちゃんの家にいません。グループホームというところに入っています。そこに行く前のおばあちゃんにはみんな困っていました。

例えば、外にいくときにくつをはくのを忘れてくつ下のまま歩いていました。それに同じ話を何回もします。会ったら毎回「大きくなったね」と言われる、インターホンを連打する、だまって家に入ってきてゆうれいみたいに立っていてみんなをびっくりさせるとかもあって、ちょっと迷惑だと思っていました。お母さんがおばあちゃんを怒っているときもありました。おじいちゃんが一番イライラしてどなったりもしていたので、敬老の日にお手紙とのどあめをプレゼントしたこともあります。おばあちゃんはイライラしたおじいちゃんに怒られてびくびくしたり、することがわからなくなって、「助けて」といったりしていました。だけど、施設ではずっと自分に寄りそってくれる人や、自分のことを理解してくれる人がいるからか、私がみていたおばあちゃんと、まったくちがいます。みんなにニコニコして自分から話しかけたり、話を聞いてあげたりしていました。すごくくらしが充実しているのだと思います。私はおばあちゃんのそんな表情は、数えられるほどしか見たことがなかったです。

この間、初めておばあちゃんの施設に行って会いにいきました。お年寄りがたくさんいました。いろんなイベントがあったときの写真がかざってあって、みんな楽しそうにしていました。一人ひとりのお部屋があって、とてもきれいにしてありました。そしておじいちゃんに会ったおばあちゃんはいつもよりすごくうれしそうでした。おばあちゃんのところに行くときは、予約しないといけないので大変です。その施設の介護の仕事をしている人は、やさしい声でおばあちゃんに私たちが来たことを知らせていました。いつもお年寄りに寄りそい続けていて、おばあちゃんも何回も「ありがとう」といっていたので、すごいと思いました。

だから私は介護の仕事につきたい気持ちになりました。お年寄りのお世話をして疲れると思うのに、笑顔をたやさずにしているところをみて、介護の仕事をしている人ってすごいなと思いました。施設によっては介護の仕事をしている人がごはんを作っているそうなので、毎日ちがうメニューを考えたりするのも大変そうだし、健康にも気をつかわないといけないとも思うし、お年寄りだから歯が悪い人がほとんどでその人たち用のメニューも必要だと思うので、とにかく大変そうです。もし、私が介護の仕事をすることになったらそのお年寄りが間違っていても怒らないし、やさしい言葉づかいで教えてあげたいです。おばあちゃんの施設で働いている人を見習いたいです。

将来のことを考えてみましたが、介護の仕事にはつきたいけれど、それにはたくさん勉強しないといけないし、まだまだ時間がかかりそうです。なので、やっぱり私はお年寄りにやさしくできる人になりたいです。それなら今すぐにでもできるし、将来、介護の仕事じゃないことがしたくなってもできることだからです。おばあちゃんのような人に笑顔になってほしいです。だから私は「お年寄りにやさしくできる人」になります。まず、おじいちゃんの誕生日を祝ってあげたいで

す。お世話になったことがあったら、すぐに「ありがとう」と伝えたり、ごはんを一緒に食べる日を増やしたいです。それに見守り隊の人に伝えられていなかった感謝の気持ちを伝えたいです。「いつもありがとうございます」と大きな声であいさつしたいです。こういう行動をしてみなさんが元気になってくれたらうれしいです。

おばあちゃんの認知症は治りません。いつか私のことも忘れるかもしれないけど、私にはおばあちゃんとの思い出がたくさんあるので、私はおばあちゃんを忘れません。おばあちゃんが元気なうちに、おばあちゃんは忘れるかもしれないけどいっぱいお話して思い出を増やしておきたいです。

